

ワークシート

※赤字は実際に生徒が記入した内容

実際はロイロノートで生徒に学習課題を提示した

1 提示した学習課題

「『院政』は、当時の社会にどのような影響を与えましたか？さまざまな視点から考え、記述してみよう」

2 提示した注意事項

- (1) これまでの学習内容を踏まえて多くの視点から考える。
- (2) 視点による捉え方の違いにも着目してみよう。

① 天皇・貴族の視点

- ・天皇からすれば自分が政治の主導権を握ることができない制度なので、権力を持つことができない。しかし、そのまま上皇になることができれば権力を持つことができるので、いかにして上皇となるかがカギであったと思う。そのためには自分の息子を天皇に就かせなければならないので、息子にスムーズに譲位することができるかが大事だったと思う。その結果幼少の天皇が増えることになったので、朝廷の運営としては大変だったのではないかと感じた。
- ・これまで摂関家として権力を握っていた藤原氏が権力を持つことができなくなった一方で、これまで権力を持つことができなかった貴族たちは、何とかして権力を持つと必死だったのではないかとと思う。その方法として賄賂が横行することとなり、政治の腐敗を招いたのではないかとと思う。
- ・上皇が権力を持ち、その周囲も自分のお気に入りの人物を置くことができたので、上皇の思うがままに政治ができた。

② 武士の視点

- ・上皇を守る軍事力として武士の地位が高まり、その結果朝廷における地位も向上したことを考えると、院政は武士にとって好都合であった。しかし、実際朝廷における地位が高まったのは一部の武士だけであり、その他多くの武士たちにとっては不満が高まる要因にもなったのではないかと感じた。
- ・院政によって武士の地位が高まったことで中央進出が可能となった。この結果平氏の勢力が高まり、平氏政権が誕生することとなった。なので、院政は武家中心の社会になったきっかけとなったのではないと思う。

③ 地方役人(国司など)の視点

- ・院政によって上皇への土地の寄進が増え、寄進が増えたことで徴税できる土地が減ったということを考えると、国司にとって院政は良くないものであったと考える。
- ・上皇のお気に入りになれば院近臣になることができ、いい思いをすることができると思うので、国司らの役人にとっては、昇進するチャンスが巡ってきたということで院政は良いものであった。

④ 民衆の視点

- ・院政が始まって、上皇への土地の寄進が増えたことから、徴税できる土地が減った。このことから土地を寄進することができない民衆らの税負担が増えると思うので、民衆にとって院政は良くなかったのではないかとと思う。
- ・上皇が長い期間政治を行うので、同じような政治が続いてしまう。それがいい政治であればいいが、悪い政治であった場合、民衆らにとって苦しい期間が続くことになる。
- ・賄賂などによって院近臣ら選ばれ、上皇の意のままに政治ができるという点から考えて、民衆の意見が反映されるような政治にはならなかったと思うので、良くなかったのではないかとと思う。